

土曜のエトセトラ

ただ今
修業中

22人目

山で働くようになって一番きつかったことは、急な斜面での作業でもなく、合わせて十キを越えるチェーンソーと燃料を持って歩くことでもない。それは、「虫」。左耳にはピアス、茶髪の青年は、ぶんぶん飛んでくるアブを苦々しげに手で追いやりながら笑った。

土佐町森林組合の技術職員、曾我部真行さん(27)。木の伐採、搬出や作業道の開設が主な仕事で、今は土佐郡土佐町西石原の民有林が仕事場。「虫、多いっす」。今回の現場はなかなかきつかったです。



小学二年からソフトボールを始め、土佐町時代は全国中学校体育大会で準優勝。高校、社会人と続けていたが、仕事との両立に悩むようになった。周囲が完全主義と評する曾我部さんは「どっちもが中途半端になるのが嫌で」、どちらをやめて同町土居の実家に帰ってきた。二十三歳のことだ。

近くでアルバイトをしながらも「このままではいかん。ちゃんとした仕事をしなければ」という思いが常にあったという。そんなとき同森林組合の作業員

「近年の林業現場は機械化が進んでいるんですよ」と、パワーショベルを操作して伐採した木を集める曾我部さん(土佐町西石原)

林業 曾我部 真行さん(27) 土佐町土居



山に光が差すように

募集を知る。それまで仕事として林業を考えたことはなかったが、祖父の手伝いをふと思い出した。「これまで仕事として林業を考えたことはなかったが、祖父の手伝いをふと思い出した。イタケのほど木出しに炭焼き。結構楽しかったな」と。これが器用な上に、ソフトボールで鍛

えた体力も十分。曾我部さんはそつなく仕事をこなしていった。「自分でも不思議なくらい。結構、いい線行きよった」そつだ。

ところが三年目を迎えた昨年、大きなけがをする。いつものように直径三十センチほどのピノキを切っていて、ばしんとチェーンソーが跳ねた。一瞬のことだった。コントロールを失ったチェーンソーは左ひざ上を直撃。曾我部さんはびっくりと開いた十センチはある傷口を見つめ、痛いという感覚よりも先に「あー、調子に乗っちゃったな」という思いが頭に浮かんだという。

全治二カ月のけがで、仕事に大きな穴をあけた。育ててくれた先輩たちへの申し訳なき、現場に出られないいらさ。「自分は山の仕事が好きなんだ」とはつきり自覚した。

山で働く覚悟ができたのはそれから。「何十年も後、この山で働く人がいい仕事をしているなあと思うような、そんな仕事をしていきたい」。何となく山に入った今どきの青年は、山に光が差し込むように今日もチェーンソーを握っている。

好きな言葉

成せば成る

写真・門田和夫
文・沢田万亀

曾我部